

株式会社ラジオ関西 説明資料

ラジオ関西 説明資料 I

2010.5.10

当社の概要

昭和 27 年 4 月 1 日、神戸放送（ラジオ神戸）として開局 コールサイン JOCR 老舗局
現在、出力 20Kw（指向性 W） 但馬放送局 JOCE を併設 兵庫県域局
電話リクエスト、ナイター放送、フォークソング・ジャズ等洋楽番組などの先駆局
神戸の土地柄、先取のパイオニア精神が社風のひとつ **新発想が必須条件**
エイズ、大震災、神戸事件、新型インフルエンザ・・・危機管理、災害報道等でも先駆的経験

説明の概要 なぜ当社がこの席に？

大都市周辺の中波ラジオ単営社

大震災を経験 生放送中に社屋“全壊（判定）”、中断ののち被災地の内から内への震災報道
経営問題に直面 独自の対応を続けている 下げ止まらない電波料→必死の営業活動も限界

○放送を軸に、放送・制作・事業・メディア開発・新営業の 5 本柱の総収入体制

・メディア開発収入 地域貢献の安心安全情報を携帯メールで配信

ひょうご防災ネット 登録 35 万人で全国有数の規模に 防犯ネットも

最初は小口課金のビジネスモデル ラジオは“無料”→ユーザー無料を基本に

・事業収入 すさまじいイベント数 → 人集めは得意 人、モノを動かす

ラジオは地域コーディネーター 束ねて、新たな企画を創生 地才地創

○放送と連動する地域貢献の新規事業の開発と展開、事業化 河川警報システムなど

・都賀川水難事故後に、中波電波で緊急シグナルを発信、回転灯で注意喚起

○関係先のご了解とご支援ご協力をいただきながらの**ラジオの可能性を探る**取り組み

当社の経営問題とは？

ここ 6 年間の総売り上げ 平成 16 年度→21 年度の電波料漸減止まらず、13.8%ダウン

同期間の電波料（収入の根幹）は、28.0%もの激減 昨年度総売り上げは 14 億 5600 万円

同期間の経常損益は、昨年度を含む前後 4 年度は黒字、真ん中の 2 年度は赤字

真ん中の 2 年間の**赤字は、新規収入の取り組みをしなかったため**。大きな教訓

毎月の綱わたり経営、生き延びるために常に新規対策が必須 「放送も」固定観念の打破

なにをして、なにをしなかったか？ その軌跡

阪神淡路大震災前の売り上げは、21億2900万円ながら6000万円の赤字 社員約110人

※昨21年度との売上げ比較は、実に約32%ものダウン 最新の社員数は32人、当時の29%

ゆるい経営体質 おっとりとした社風 中長期の経営計画なし その日暮らし経営

全壊の社屋 放送機器を含め設備壊滅 放送の同録装置も破壊 正規の放送記録なし

行き先なく、裏の駐車場にプレファブ作りの仮社屋で1年 「ラジ関は倒産するらしい・・・」

平成7、8年度は“大震災特需？”+高い評価や表彰 みな一種の“クライシスハイ”状態大震災ダメージがじわじわと しかし社内での危機感や情報の共有なし

この頃から「ラジオ関西地域防災ネットワーク」構築作業 **1局での限界痛感**

無策のまま→11年度に一挙に経営状態が悪化 優遇退職実施14人 社屋の建物&底地売却 人減らしと賃金抑制などの目先の経費削減対策 この間も収入減少の傾向止まらず

13年度に、新規収入開発の経営命令？出る **放送との連動のなかで地域貢献&収入貢献へ**

○携帯メール事業 元手400万円でスタート 失敗ダメ! 即効の売上げが必須!

- ・『ラジオは**欲しい情報を流してくれない**』 よいこネット・幼稚園ネット
- ・余裕のない、しんどい展開のなかでの一定の手ごたえ、確信
- ・**速報はメールで??** 不安な地域社会に、地元ラジオが役立ち情報を発信!
- ・台風23号の但馬・淡路水難を機に、ひょうご防災ネット立ち上げ
- ・子供への悲惨な犯罪多発を機に、同防犯ネット立ち上げ
- ・本業の放送との明確な棲み分け・連動、放送への誘導 緊急時の共助意識啓蒙
- ・社内体制もシフト 少人数のなか、専門部署が始動。売上げの約7%に

○**中波電波でエリアに緊急シグナル発信** 新発想の新規プロジェクト実施へ!

- ・携帯メールシステムの懸念 肝心の緊急時の輻輳の心配がきっかけ
- ・4年前に社内に研究チーム 特に淡路島南端への津波シグナル発信を想定
- ・緊急地震情報の割り込み放送もヒント しかし、ラジオを**On**してないと
- ・24時間体制で、**Push**で緊急情報を送りたい **専用受信端末開発**
- ・投網スタイル(放送)ではなく、地域・用途ごとの個別送信が出来ないか
- ・施設・人・ノウハウのあるラジオ局、既存インフラとして活用できる
- ・中波の緊急情報送信システム **「ラジオQQシステム」V1完成**
- ・20年の都賀川水難事故を契機に20河川109機の河川警報システム構築事業
- ・これを受けて、社の編成方針に『地域の安全安心ステーション』を掲げる
- ・今も社内で事務局開設、研究開発を継続 バージョンアップを目指す

参考：大震災後の安全安心への取り組み事例

- ・ ライフラインマスコミ連絡会立ち上げ、全国へ呼びかけ
- ・ 兵庫県との直結の常設ホットライン 毎月 17 日に想定放送 11 年以上継続中
- ・ 県下のコミュニティ FM 局 9 局との共助協定、週一で番組交換 12 年間継続中
- ・ 2002.8（7 年半後）に、69 時間の震災直後の放送を文字化、出版
- ・ 津波対策で、大阪放送、和歌山放送と被災時の放送乗り入れ相互援助協定 2005.9
- ・ 地域防災の基本は、わが街をもっと知って もっと愛して・・・「おもしろ神戸学！」
- ・ ちびっこ向けオリジナル防災キャラバン 「みんな元気！QQ 体操」「防災えほん」
- ・ 中波による緊急シグナル放送（上記のとおり）

最後に

当社が、厳しい状況下、ラジオ局としての放送（社会的な役割）を続けている想いというか指針の根本は、「Radio 69 時間震災報道」のあとがきにも記載してあります。

『～あの瓦礫のやまのような局舎の中で、よくぞこのような放送ができたものだと感慨が次々に湧いてきます。とくにリスナーとの情報交換が、これほど具体的に、迅速に実行できたラジオというメディアの役割に思いを致さないわけにはゆきません。（中略）AM 神戸（ラジオ関西）が、こうした情報の中継基地であるとともに、救援放送局となったことを、わたしたちは誇りに思っています。～』

この想い、この指針は今も受け継がれており、これに基づいた取り組みが続いているのは、ご説明した通りです。当社にとっての大震災での被災は様々な意味で実に大きかったのです。

ただ、民間放送局でもある当社にとって、無償のボランティア放送、地域貢献はできません。地域貢献は大切ではありますが、自己満足だけでは継続的な運営は不可能です。当社の場合、事業（生業）として必ず会社（収入）貢献も同時に満たすことを基本としてきました。

そして、災害時にだけ有効な非常時メディアであってはいけないとも考えています。

地域に根ざした、地域に信頼され愛されている一番身近な“普段着のお隣さん”メディアの特性を精一杯活用してのあり方・活かされ方を探り実行する中で、地域貢献と会社（収入）貢献を両立できる道が出てくると信じています。

社の経営状況や社会事情が刻々と変化し、特にラジオを始めメディアをとりまく社会情勢も日々、大きく変わりつつあるなか、新しいもの（状況）へのチャレンジとあわせ、現況での可能性を探りつづける努力も怠ってはいけないと考えております。 以上

ラジオと地域情報メディアの今後に関する研究会

ラジオ関西 説明資料Ⅱ

2010.5.10

CRKラジオ関西 558kHz
RADIO KANSAI

RADIO KANSAI

大震災前の社屋

1968年(昭和43年)から
1995年(平成7年)まで
27年間在局



神戸市須磨区行幸町
11階建ての旧本社ビル





© ラジオ関西

全壊判定の本社 録音スタジオ前の状況

4つのスタジオが壊滅。
オンエアスタジオだけが、かろうじて全壊を免れました。



© ラジオ関西



スタジオ前廊下



局の財産レコード室の状況
完全復帰まで1年半以上かかりました。



社の資料・備品室
保存の過去の放送テープや重要書籍類が全滅
放送局の貴重な“財産”が消えました。

木造家屋の被害甚大



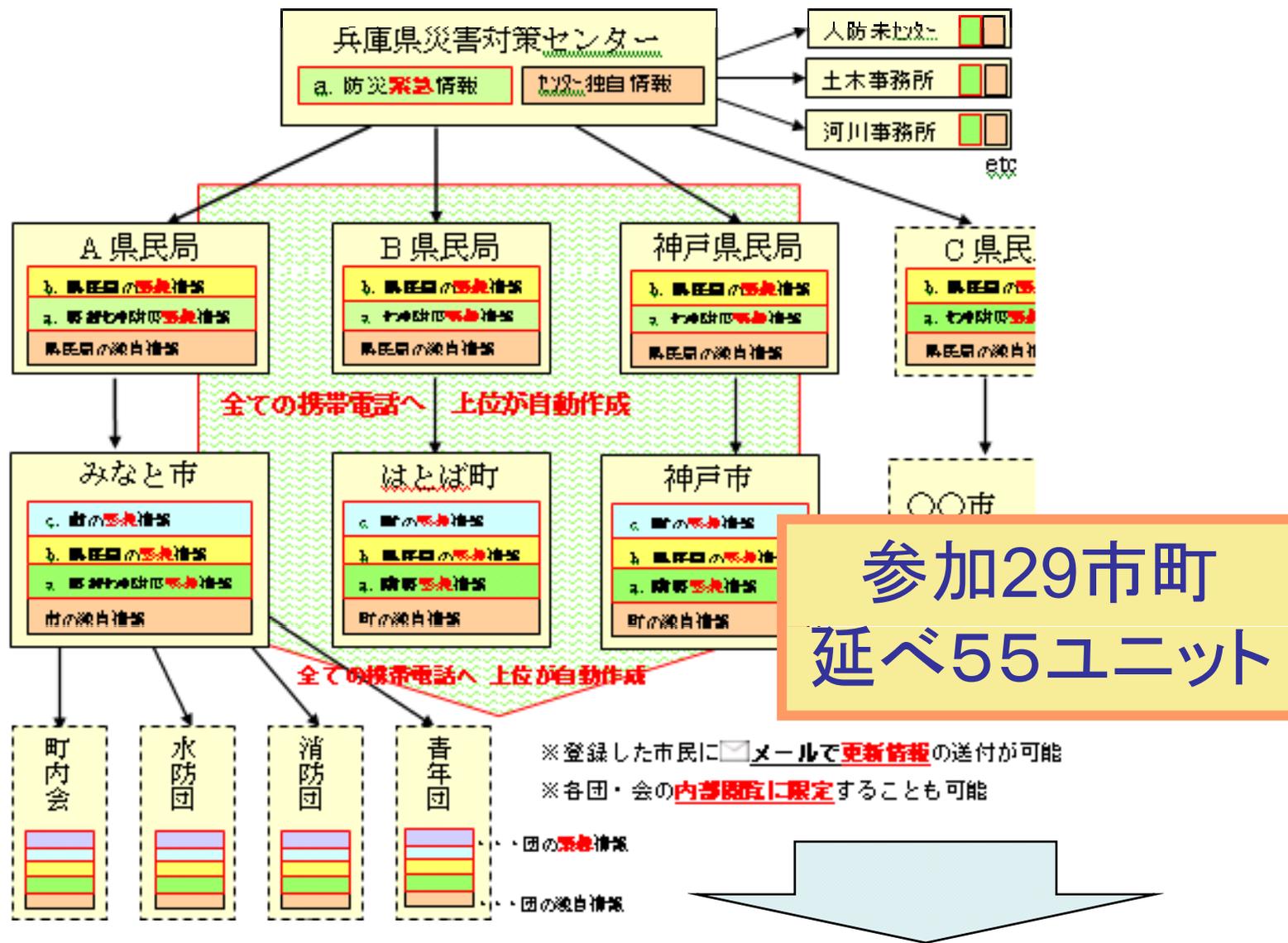
至る所がこんな状況 中からうめき声も。
『救命救急放送に徹しよう!』



穴倉のようなところで、24時間、
安否情報を受けつづけました。
(一時避難社屋で)



ひょうご防災ネット概念図



配信希望の市民へ緊急&更新メールが届く

「QQ体操」の県下キャラバンの様子

大震災を知らない地域のちびっこ達のための防災オリジナルダンスと歌。2年前に、「おもしろ神戸学」とともに自主制作。大震災以来のストイックな取り組みからようやく脱皮した、肩の力を抜いたプロジェクト。「QQ体操」のQQは救命救急の意。放送でのPRに合わせ、県下の保育園幼稚園を巡回している。内容は、自分の身を守り、家族と一緒に、仲良さんの安全も確認しようという“自助、共助”を歌とダンスで表現しています。



中波電波による
回転灯の点灯・消灯シグナルの発信
河川警報システム受信端末

(ラジオQQシステム)

20年7月28日の神戸灘区の
都賀川水難事故をきっかけに、
都賀川など六甲山南麓の20河川の
親水公園109箇所に
昨年度から設置、運営されている。



ラジオQQシステム



RADIO KANSAI

10

増水の危険

ラジオ波送信 警報装置起動

神戸市灘区の都賀川が増水して5人が死亡した事故を受け、兵庫県は3日、AMラジオ波の信号で起動する警報装置（回転灯）を、六甲山南側の12河川84カ所で整備する、と発表した。ラジオ関西（神戸市）などが津波などを想定して2年がかりで開発した新システムで、広域に一斉起動でき、設置しやすい利点がある。総務省によると、ラジオ電波で警報装置を動かす仕組みは全国初という。

県によると、大雨、洪水の警報・注意報が出た場合に、ラジオ関西から電波（中波）に乗せてトーン信号を自動的に発信する。親水施設周辺の回転灯に併設された受信機がこの信号を受けると、回転灯が作動する。ラジオ関西な

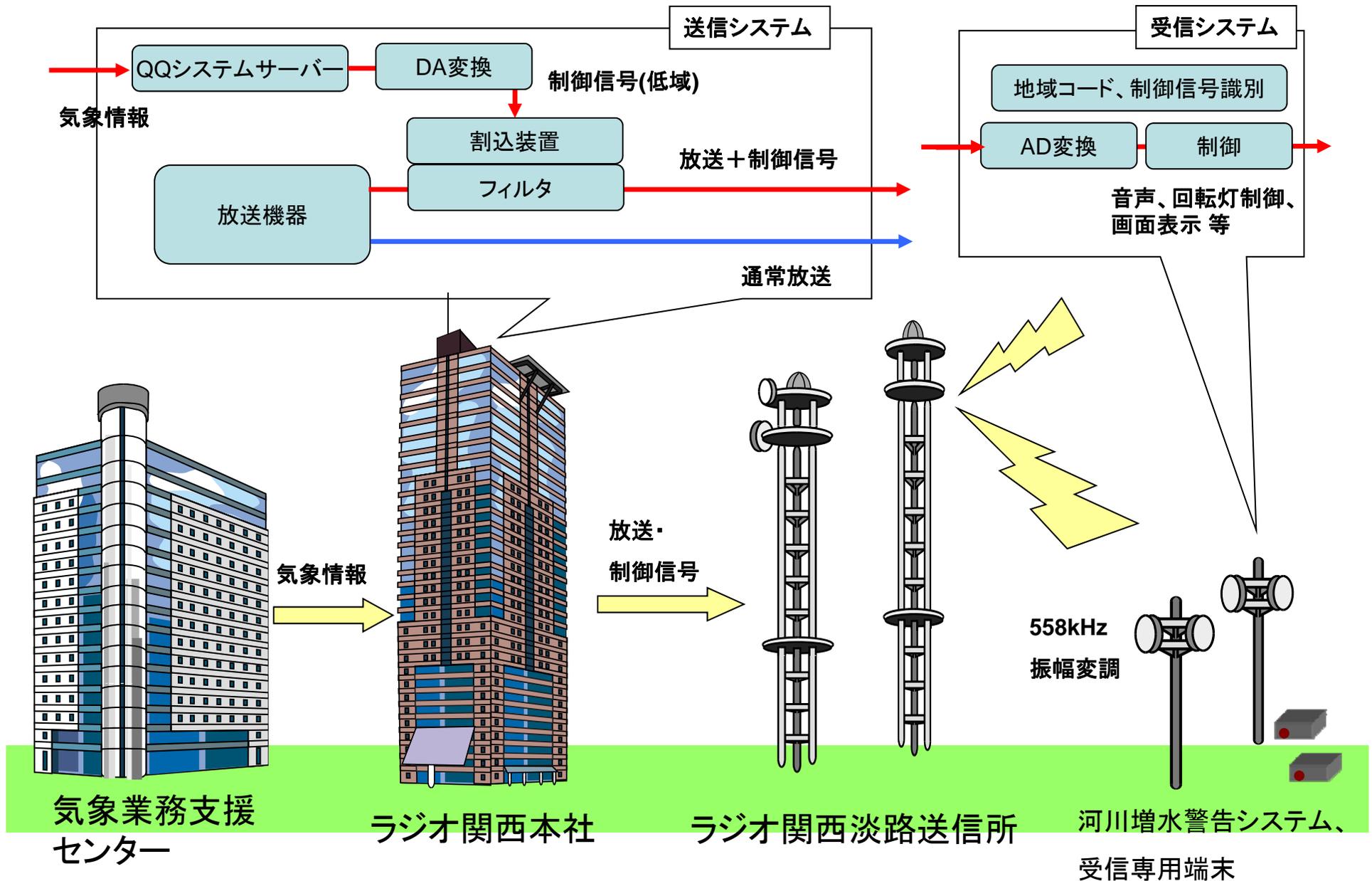
六甲山南側 12河川に 兵庫県が整備

どが津波などを想定して実証実験などを進めていた。

新設されるのは、都賀川、住吉川、芦屋川、夙川など神戸、芦屋、西宮各市の11河川76カ所。新湊川（神戸市）では既存の8カ所の装置を改良する。県は15河川で設置を検討してきたが、3河川は急な増水の危険が小さいと判断して見送った。都賀川では橋の下で雨宿りをしていた人が逃げ遅れたため、橋周辺を中心に設置する予定で、都賀川は今年度中に、そのほかは来年の梅雨の時期までに整備する。今後、六甲山南側以外で親水施設がある51河川への設置も検討する。神戸市も市管理の5河川に警報装置を整備する方針だが、システム内容はまだ決めていない。

9/4 朝日

ラジオQQシステム図



- 緊急時に放送局の電波にアナログシグナルを乗せて広域に送信。放送されたそのシグナルを、新開発の専用端末で自動受信し、防災・減災のため、音声や文字や警報音を自動発生させます。
- 津波等速報・即応が必須の大災害時の緊急情報伝達
 - 広域、瞬時に輻輳なく送信
 - 既存のインフラ 中波ラジオ局の電波と人材を活用
個別・地域・内容での別対応可能

地域の中波ラジオ局ラジオ関西は、
災害など地域の緊急時には、「必要な情報・安心で
きる情報」を「必要とする人々に正確かつ、素早く」
自社のもつ全ての手段を通して放送・配信することを
常に念頭において、新しい取り組みに挑戦し続けて
います。

避けられないデジタル化の流れや、メディアが多様
化する中、独自の視点・独自のネットワークを活用
しながら、地域の情報発信ステーションであり続ける
可能性を探っています。

そのためには、毎日毎日の放送活動で、愛され
信頼されることが基本であると肝に銘じています。

終